

審査の結果の要旨

氏名 辻野 武

本研究は、成人生体肝移植後の胆道合併症に対する内視鏡的治療、とくに胆管狭窄に対しての胆管ステントを留置しない内視鏡的治療（狭窄部のバルーン拡張+ENBD チューブ留置）の有用性と安全性を評価し、その問題点と限界についても検討すると同時に、成人生体肝移植の胆道合併症に対する内視鏡的治療の意義を明らかにすることを目的で行われた。18例の成人生体肝移植後胆道合併症に対して内視鏡的治療の成功率、早期合併症、予後について検討を行い、下記の結果を得ている。

1. 胆管狭窄 17 例中 12 例（71%）で内視鏡的治療に成功した。12 例のうち 9 例は狭窄部のバルーン拡張と ENBD チューブ留置のみで狭窄は改善した。経過観察中、9 例中 5 例（56%）は無再発であり、4 例（44%）は狭窄の再発を認めた。累積再発率は最終 ERCP のから 6 か月の時点で 11.1%、12 か月で 40.7% であった。再発した 4 例は全例、内視鏡的に再治療可能であった。
2. 胆管狭窄に対して胆管ステントを留置した 4 例のうち、長期的に成功したのは 1 例と不良であった。その原因として、市販されている胆管ステントが生体肝移植後の屈曲した胆管に合わなかったことが考えられた。
3. 胆汁漏 3 例のうち 2 例は内視鏡的に治療可能であったが、胆管狭窄と biliary cast を合併した 1 例は開腹手術となった。Biliary cast 9 例のうち 8 例は内視鏡的乳頭バルーン拡張術で完全除去しえた。
4. 胆道合併症 18 例に対して計 77 回の内視鏡的治療が行われたが、内視鏡的手技に起因する早期合併症は急性胆管炎 1 例（1.3%）のみであった。

以上、本論文は成人生体肝移植後の胆道合併症に対する内視鏡的治療の有用性および問題点を明らかにした。今後の成人生体肝移植後の胆道合併症に対する治療法の向上に貢献すると考えられ、学位授与に値するものと考えられる。